

創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫

— 科目「子どもとことば」での試み（報告1） —

吉 田 若 葉

I 養成過程における問題

1、学生の意識

本学北陸学院短期大学 保育学科では、幼稚園教諭2種免許と保育士資格の二つの資格が同時に取得できる。学生たちは、二つの資格取得のために数多くの科目を履修しなければならない。そして、2年間という短期間の学びで保育の現場へ出て行かなければならない。本学科の学生在籍数は一学年120名余りである。二学年併せると約250名もの学生を保育者として養成する教員にとって、いかに効果的に効率よく授業を行うかは、頭の痛い大きな課題である。効果的な教授内容には、教員の工夫や努力は勿論であるが、学生自身の意識が大きく左右する。確固とした目標をもって積極的に学んでいる学生もいるが、目的意識が曖昧で授業への取り組みに消極的な学生が増えてくると、授業の進度にも影響が出てくる。また、学んだことを自分なりに総合していく力に乏しく、各科目で学んだことを関連させて自分なりの表現として創りあげていくことが苦手な学生も多いので、事あるごとに、手取り足取りして教えていかなければならないのが現状である。

2. 保育現場での実習

学生にとって保育現場での実習は、学生生活のなかでも大きな比重を占めている。学生は、実習を通して子どもを知り、保育の楽しさと大変さを実感していく。そして、学生自身が人間的に大きく成長できる時ともなる。また実習は、学校での学びと実践が結びつく場であるから、養成校の教員にとっては、教授内容が問われる時でもある。

保育の現場にとって実習生を受入れるということは、人手が増えて助かる場合もあるが、足手まといになることのほうが多いように思う。しかし、将来の幼児教育を担う有望な保育者育成のために、保育園や幼稚園の現場においても、保育者養成の任を負ってもらわなければならない。そして、実習のあり方について、養成校とともに是非考えてもらいたいと思う。

実習の最重要課題は、子どもとの関わり方を学ぶことである。子どもとの関わり方を学ぶ最良の方法として、保育現場には二通りの意見がある。一つは、先ず子どもたちと十分に遊ぶなかで子どもの姿を知り、子どもとの関わり方を学ぶという意見である。そしてもう一つは、子どもと遊んでいるだけでは、何も学べない学生もいるので、お話しや絵本の読み聞かせ、歌やゲームの指導などの技術的な課題をこなしていくことで、反応する子どもとの関わり方を学んでいくという意見である。この二つの意見は、どちらも子どもとの関わり方を学ぶうえには大切な事であるが、理解すべき対象

である子どもの姿に、明らかに相違がある。一方は、一人ひとりの子どものありのままの姿であり、もう一方は、学生が中心となって進める活動に対する子どもの姿である。最近の学生の傾向として、許容量の少ない学生も多いので、限られた実習期間中に何を優先してどのように学ばせるかということは、とても重要な問題である。課題を沢山与えられると、そのことで頭が一杯になり、子どものありのままの姿を見ることよりも、保育にとってパフォーマンス的なことが最も大切だと感じてしまう学生も多くいる。また実習では、現場の保育を学ぶ以前に問題をかかえてしまう学生もいる。保育者や実習生同士との人間関係のなかで疲れてしまう学生や、些細な事で落ち込んでしまう学生もいて、そのケアも深刻な問題である。

3. 教授内容の工夫

本学では、学生たちの現状を踏まえ、1年次から段階を追って子どもとの関わりを学んでいけるように実習の時間を組んではいるが、授業内容と実習との兼合いもなかなか難しい。学生の子どもの理解や応用する能力等を考慮した教授内容の工夫が必要である。

教授内容の工夫については、養成過程での問題と課題を整理しながら、より良い方法を探っているのが現状である。

II 養成過程で今求められているもの

1. 探求的姿勢の重視

本学科のカリキュラムでは、保育の理論や子どもの育ちの科学に関して学び、保育に必要な技能を身に付け、保育内容と実践に関する科目を通して実習を経験し、保育に関連した現場に対応できる人材の育成を目指している（註1）。しかし、教授内容は、教員の専門性や個性に依るところが大きい。したがって、学生が保育者として現場に立った時に、学生時代に学んだことが生かされるかという、必ずしもそうではない。幼稚園や保育園では、それぞれの園の運営方針によって様々な特色ある保育が行われているからである。では、どのような保育現場にあっても対応できるような保育者を養成するために、最も求められていることは何か。関口はつ江（註2）は、日本保育学会第52回大会企画シンポジウム「今 現場で何が問題か—園を変え、実践を変え、自分を変えるために」で論じられた内容について、「保育者にとって重要なこととして、現在の自分の保育を省察し成長していくこと、そうした保育者が育つ素地を生み出すこと、現在の保育から出発してそれを見直しして変えていくこと、保育者が自分の心と体を動かしながら保育の営みに真剣に向き合おうとする姿勢を養うためには、養成過程において知識・技術注入から、探求的議論を重視した授業へかわることの重要性などが議論された。」と述べている。ここでは、養成過程において、知識・技術注入を中心とする授業から探求的議論を重視した授業へかわることが求められている。つまり養成課程において、自分の保育を省察して成長していける保育者としての基礎が養われることが求められているのである。

保育者が自分の保育を省察するということについて、森上史朗（註3）は、「研究するというこ

とは、日々流されてしまいがちな保育を省察することにある。一瞬一瞬の判断や行動の積み重ねが保育であるならば、自分の保育を振り返ることは、次の機会をよりよい保育とするために必要なことなのである。そのためには、いくら実践的な研究とはいえ、理論的な裏づけが必要である。なぜ、何のためにそのような保育をするのかという保育者への問いは、その時の保育の状況、つまり子どもと保育者の関係や、子ども同士の関係、保育者の心の動きなどが含まれることはもちろんのこと、深く保育の歴史に関係している場合も往々にある。さらに、子どもが社会的な影響を受けて育つ存在である以上、……理論的な裏づけを必要とする問題は山ほどある。」と述べ、保育研究、つまり保育を省察することの重要性を示している。この点からも、養成過程での探求的議論を重視した授業の重要性が示されている。ただ、学生の現状を考えた時、探求的議論の重視よりも、先ず探求的な姿勢を重視した授業が必要だろうと考える。

筆者は、現在本学附属幼稚園のアドバイザーとして保育の現場に携わっているが、保育内容に関する現場の保育者との話し合いは頻繁に行っている。そして、保育を見直し、よりよい保育を求めていこうとする保育者の姿勢が、どんなにか子どもたちの生き生きとした生活を生み出していくものかを目の当たりにしている。

2. 創造性の育成

倉橋惣三は、保育者の子どもとの関わり方について、「保育者は子どもとは何かを知識で知って後に保育するのではなく、あるがままの子どもを生かす保育をするなかで子どもの本性を知る」（註4）と述べている。先ずは、あるがままの子どもを受け入れることである。そこから、どうしたら子ども一人ひとりが生かされるかを熟慮して、子どもと共に園生活の環境を創りあげていくことが保育の基本であろう。理論的な知識は、創りあげていく過程で有効に働いていくのである。

また、保育者は人的な環境として、子どもたちに大きな影響を与えるモデルでもあるので、保育では当然保育者の生き方が問われてくる。人間の生き方としての視点から捉えると、日々自分の保育を見直して変えようとしている保育者は、創造的な生き方のできる人といえるのではないだろうか。筆者は、これまで「創造的な人間形成」を基本において実践研究を行っているが、「創造性」については、マズローが唱える自己実現の創造性（註5）の観点に立っている。自己実現とは、自己を発見し、自己改造を続け、人間としてすぐれた存在になっていくことであり（註6）、すべての人にその育成が望まれる。

実習中の学生にとって、子どもを生かして、子どもと共に創りあげる保育など到底できる筈もない。しかし、子どもと一緒に心も体も動かして自分なりに子どもを知ることにはできるし、先輩保育者の姿勢からも多くのことを学ぶことができる。まさにそのことが、保育を創りあげる基礎となるのである。学生の積極的な実習に対する姿勢も、また創造的であるといえる。

保育の現場では、さまざまな特色をもった保育がおこなわれているが、《幼稚園教育要領》と《保育所保育指針》では、創造的で個性ある人間を育成する教育が求められている。（註7）

保育において「創造性」を養うということは、自己実現の創造性の観点に立つならば、子どもた

吉 田 若 葉

ちが自分らしさを表現しながら生きる力を身につけていくことであり、その過程には、当然、創造性豊かな保育者との関わりが求められるのである。

したがて、養成過程においても、あらゆる機会を通して、学生自身の創造性を育成することが望まれる。

そこで本稿では、科目「子どもとことば（演習）」での試みを報告し、創造性豊かな保育者を目指す授業のあり方を探っていく。

Ⅲ 演習のねらい

科目「子どもとことば」の授業形態は演習であり、単位数は、「子どもとことばⅠ」で1単位、「子どもとことばⅡ」で1単位である。カリキュラム改変で、学年学期配当の時間割が定まらず「Ⅰ」を1年前期・「Ⅱ」を2年後期、「Ⅰ」を1年前期・「Ⅱ」を2年前期、そして「Ⅰ」を1年前期・「Ⅱ」を1年後期の場合があった。授業形態が演習の場合は、学生の保育内容への理解や実習経験による子ども理解が授業効果に大きく影響を及ぼすので、学生の実態に応じて、教授内容の見直しと工夫を重ねてきた。

2004年度からは、「Ⅰ」が1年次後期に、「Ⅱ」が実習終了後の2年次後期となったので、今後とも継続して教授内容の見直しを行っていくが、今回本稿においては、これまでの「Ⅰ」「Ⅱ」をまとめて「子どもとことば」での試みとして報告していく。

授業では、本稿Ⅰで述べた養成過程での問題とⅡで述べた、養成過程で今求められているものを踏まえ、以下のような項目についてねらいを持って進めている。

1. 子どもとことばについての知識

演習科目なので、子どもがどのように「ことば」を獲得していくのかについての知識を深めていくと同時に、「ことば」を育てるために保育者としてどのような援助をしたらよいかを、理論と実践の両面から考察していく。

理論的な知識については、教科書（註8）にそって講義し、プリントの配付や事例を紹介して内容を補足している。講義内容は、1. 子どもにとって「ことば」とは何か 2. 子どもの発達と「ことば」はどのように関連しているか 3. 保育内容としての領域「ことば」と保育のなかでの「ことば」の実態 4. 子どもの「ことば」と保育者のかかわり 5. 「ことば」の育つ環境 の5項目である。他、実践のなかで必要なことを補足していく。

補足として特に『日本語』（註9）の中から抜粋した文章を紹介している。この本は、1979年に文部省学習指導要領にとらわれない、小学校一年生のための国語教科書を想定して書かれた本である。言語の基本である「話し・聞く」行為を重視して子どもに語っているので、養成過程にある学生にとって、大変参考になる。谷川俊太郎（註10）は「言語を知識としてよりも、自分と他人との関係をつくる行動のひとつとして、まずとらえています。そのためには、ことばの意味伝達、感情表出のはたらきと同時に、意味や音韻面での遊びも無視できません。ことばの豊かさをまるごとと

らえること、ことばは口先だけのものでも、文字づらだけのものでもなく、全身心をあげてかかわるものだということを、子どもたちに知ってほしいと思います。」と述べているが、同様に、学生にも感じ取ってもらいたいと思い紹介している。

2. 教材の選択と教材研究の重視

子どもの育ちにとって環境は多大な影響をもつ。子どもたちに豊かな保育環境を提供するためには、保育者のたゆみない教材研究への姿勢が重要である。したがって、養成過程のうちから、教材研究の重要性を実感しておく必要がある。子どもの感性と「ことば」の世界を豊かにするためにどのような教材を用いたらよいのか、様々な機会を通して考えていく。学生自身の好みで選択したものを実際に用いてみて評価することや、与えられた教材を検討して学ぶ機会を用意している。

教材研究を深めていくためには、先にも述べたように探求的な姿勢が求められる。学生の中には自分自身を表現することが苦手な者もいるので、グループ活動を展開するなかで、自分の感じたことを素直に表現することや、学生同士で批評し合うこと、疑問に思ったことを調べて話し合うことを重視し探求的な姿勢を培っている。

3. 創造的な工夫

幼稚園教育要領の総則では、まず幼稚園教育の基本として「幼稚園教育は、幼児期の特性をふまえて環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。(註11)」と示され、保育者の創造性が求められている。

養成過程において、創造性豊かな保育者を目指すには、あらゆる機会を通じて、学生自身が創造的な工夫をできるようにしていかなければならない。創造的であるということは、問題解決能力に優れているということでもあるが、創造的な能力を養うためには、創造性にはたらく要因を押さえておかなければならない。

木村信之は、創造性にはたらく要因として、自発性・努力・興味・過去経験・感情のはたらき・集団をあげている。(註12)

- ・自発性：適切な自発性をもった行動は、能動的で目的がはっきりしていて、対象に興味をもち、行動が持続的で創造的な結果を生む。
- ・努力：問題解決の過程において、努力する態度は、とても重要なことである。
- ・興味：興味と能力には循環関係が起こる。
- ・過去経験：新しい課題に向かった場合、固定した観念や強い行動の習慣化があった場合は、創造の障害になる。しかし、多くの問題の経験や、基本的な経験、固定化習慣化していない柔軟な学習経験は、創造性に有効にはたらく。
- ・感情のはたらき：感情は、行動を起こさせ、行動に伴うので、創造的行為に大きな影響を与える。

- ・ 集 団：集団は、問題解決などにおいて、集団相互作用により、個人学習に比べて優位である。

4. 教材の製作

保育の現場では、絵本や紙芝居、エプロンシアターの他、パネルシアターやペープサートがよく教材として用いられている。パネルシアターでは、コピーをして彩色すればよだけの教材も販売されているが、本授業では、対象である子どもの反応をイメージしながら、学生自身が考えて工夫することを重視してパネルシアターやペープサートを製作している。この活動では、学生自身の創造性を養うとともに、創りあげる過程で、教員がしっかりと付き合い探求的な姿勢を培っていく。

教材製作は二通りの経験をする。

①自分の教材を製作

実習で使用する手持ちの教材として、学生が一人で製作する。

②教材室の貸出し用教材の製作

本学には視聴覚教材室があり、学生の実習中に教材を貸し出している。直に子どもたちの目に触れるものなので、毎年学生が製作した教材を補充し、教材室の充実を図っている。2年次の実習後に製作すると、現場で使われることが励みになって、どの学生も1年次の時よりも熱心に製作に打ち込む。この活動は、グループ製作として行うので、創作の過程では、協調性に支えられた探求的な話し合いが求められ創造的な姿勢が培われてくる。

5. 小グループでの活動

本学での演習科目は、I学年をA・B 2グループに分けて授業が行われている。それでも60名余りの人数なので、「子どもとことば」の授業では、できるだけ教授内容を徹底させてその効果をあげるために、小グループでの活動を行っている。グループ構成は名簿順に7～8名で組む時もあるが、4～6名の好きなメンバーで組む時もある。

グループでの活動は、身近で他人の意見や表現に触れ、刺激を受けることができる。学生によっては、たとえ小グループであっても、人前で表現することが恥ずかしいと感じる者もいるので、親しい友達と組むことで、人前で表現することに少しずつ慣れるようにしている。また、グループ内で話し合いをして評価し合うことで、他から指摘を受けることに慣れることや自分の考えを深める姿勢を養うこともねらいとしている。

6. 自分自身への気づき

創造的になるためには、本稿Ⅱ-2で述べたように、自己を発見して自己を改造して自己実現がなされなければならない。本授業では、学生が授業を受けて何を学んだかを、活動記録用紙で提出させている。特に自分自身への気づきの欄を設けて、自己を見つめることを意識させている。

IV 演習での試み

本稿では、演習での試みを、6項目に整理して報告するが、活動記録用紙に書かれた活動の感想と自分自身への気づきに関しては、紙面の関係上最も多かった意見、あるいは筆者が注目すべきと判断したものを報告する。

1. 読み聞かせ

①教科書の輪読

本授業で教科書を用いる時には、小グループで輪読することになっている。教科書にそった講義の時には、集中を欠いてしまう学生も多いので、句点で交代して輪読を行う。その際には、ゆっくりと明確な発音で読むことを意識させている。輪読は文章の内容に集中できるメリットの他、人前で声を出す練習にもなることと、間の取り方や自分の発声をコントロールする練習のよい機会となる。

②自分が心ひかれる絵本を選ぶ

絵本は、子どものことばの世界を豊かに広げてくれる。学生たちは、数多い絵本のなかから保育者という視点で絵本を選択できるようにならなければならない。

子どもに読んであげる絵本は、まず自分が心をひかれるものでなくてはならない。自分の心に響くものでなければ、子どもにその魅力を伝えることはできないだろう。そのために、「絵本をたくさん読むこと」これは、絵本選びの大原則である（註13）。

そこで、図書館の絵本の中から学生自身が心に響く本を選び、実習で役立つように、絵本リストを作成している。

③小グループで読む

作成した絵本リストの中から選択して、グループ内で読み聞かせをする。グループで読み聞かせをすることで、読み手の立場として、読む側の姿勢や読み方を比較して学ぶことができる。また、聞く子どもの目線で子どもの気持ちを感じることもできる。さらにグループの人数分の新たな本をリストに加えることができる利点もある。

④活動の感想

- ・文字で見ると簡単だが、読むと難しい。
- ・自分では発表する時のイメージができていたのに、前に立つと思うようにいかなかった。
- ・絵本の読み方に読む人の人柄が出てくる。
- ・聞いていると、読んでいる人がどのくらいその本を読んでいるかがわかる。
- ・子どもの立場になると、読み手の時には全く気にならなかった、椅子の座り方、絵本を持つ角度や高さ、持ち方が非常に気になった。

吉 田 若 葉

- ・いろいろな絵本があっておもしろかった。読むスピード、ページをめくるタイミング、声の強弱が大切だと感じた。

⑤自分自身への気づき

- ・緊張して、練習の時のように読めなかった。途中から手が震えていたので驚いた。
- ・友達の読み聞かせを聞いて、子どもになった気分になった。
- ・実際にやってみて、自分の読み方の癖がわかった。
- ・もう恥ずかしいという気持ちは捨てようと思いました。
- ・子どもへのことば掛けを簡潔にポイントを捉えてする、という意味が、導入やまとめを考えるうちに少しだけわかったように思う。

2. ことばの音がみえる絵本（ことば・音・形）

詩人の谷川氏は、擬音語を“おとまねことば”、擬態語を“ありさまことば”といいあらわして、(註14)「“おとまねことば”や“ありさまことば”は、ふつうのことばよりも、人間のからだの感覚に直接むすびついていることから、子どもたちにとって楽しく感じられる……」とその特質を語っている。“おとまねことば”や“ありさまことば”は、ことばの感覚を豊かにし、ことばの楽しさを生理的に味わうことができるので、子どもたちには是非読んであげたい。

①グループで豊かな表現を創りあげる

“ありさまことば・おとまねことば”で表現されている『もこ もこもこ』(註15)『ころころころ』(註16)『ごぶごぶ ごぼごぼ』(註17)の絵本を一グループ一冊ずつ担当する。グループ全員で一冊の本を読み聞かせすることは、一冊の本を中心に、表現の仕方を互いに評価し合い学ぶことができる。全員が読んだ後でグループの中から代表者を決め、代表者に対して、さらに豊かな表現になるようにグループ全員で意見を出し合う。その後、代表者はクラス全員の前で読み聞かせの発表をする。同じ本を読むグループが2グループ以上あるので、同じものでも表現の仕方が違っておもしろい。また、十分に練りあげられた読み聞かせは、必ず聞く人の心を引き付けるので、ここで学生は、教材研究の重要性を実感することができる。

②活動の感想

- ・音だけで絵本として成り立つのか不思議だったが、私の心の中に十分に残った。
- ・同じ本なのに、読む人によって違う本のように思えることが、不思議で楽しかった。
- ・同じ作品でも読む人が違うと、笑いが起きたり、真剣に見たりと見る側の反応に違いが出た。読む人の感じ方で表現がちがってくるのだろう。

③自分自身への気づき

- ・みんなの発表がおもしろく、絵本を楽しんでいる自分に気づいた。

- ・興味、関心が高められると、素直に受入れる心を自分も持っていることに気づき、幼児が活動に引きつけられている時は、こういう感じなのだなって思った。今後活動を考える時、自分自身がひきつけられるかを意識しながら考えていきたい。
- ・想像ができて、なかなか声で表すことができなかった。
- ・自分が読んだ時は何気なく読んでいて、つまらない絵本だと思っていたのに、発表した人の読み方を聞いて、あの本がこんなにもおもしろくなるのかと気づいた。
- ・一冊の本を読むのに、ここまで深く考えて読んだことはなかった。みんなで考えていくにつれて、どんどんイメージがわいてきました。
- ・何度も読むと、いろいろイメージが変わることを知った。

3. 音の色と形を考える

『がちゃがちゃどんどん』（註18）という絵本がある。これもことばの音がみえる絵本であるが、この絵本の作家元永定正が、「この本は音に形はないけれど、音の形を考えて絵本にすれば面白いものになるかもしれない、と思ったところから始まりました。（註19）」と絵本の折り込みふろくに書いている。そこからヒントを得た音の色と形を絵にする活動である。ガタン ドーン サヤサヤ ビューン クルクルなど“ありさまことば・おとまねことば”のイメージを絵で表現するが、元永定正も書いているように、やってみると、これがなかなか難しい。音は見えないし色もない。心に見えてきた音の色と形であり、それは人によってそれぞれ感じかたが違うものである。この活動では、同じ音でも違ったものが生まれることを、感じてほしいとのねらいをもっている。保育者は、子ども一人ひとりの表現を大切に育んでいかなければならないのである。

①活動の感想

- ・音を絵で表現する作業は、とても難しく大変だった。形はできても色や字の太さはどうするかなど悩む点も多かった。
- ・同じことばでも一人ひとりが違った感覚をもっていて、いろんな絵で表現していた。イメージはわくけれど、絵にするのは難しかった。そして、さらに難しかったのが、声で表すことだった。

②自分自身への気づき

- ・頭の中に思い描くことはできるけど、それを実際に描くことができませんでした。とっても悔しかったです。
- ・今までは細かい作業が面倒で嫌いだったが、結構楽しかった。
- ・最初はなかなかイメージがわかかなかったが、いろいろと考えているうちに、次々と考えができて、自分なりに工夫ができた。

4. 想像して考える

想像と思考は、創造的なものを生み出す両輪であるといわれる（註20）が、学生自身の創造を刺激するために、想像と思考を用いる遊びを考えてみた。

①「くつがあつたらなにをする」

まさに『くつがあつたらなにをする』（註21）の絵本からヒントを得たもので、靴をどんなふうに使ったらおもしろいかを想像して、絵でも表現する。

②替え歌

替え歌は、想像力と思考を用いる楽しい遊びとして、子どもも好む活動である。元歌として使用しているのは、以下の3曲である。3曲とも“ありさまことば”や“おとまねことば”を楽しんで歌えるように替え歌を考えることをねらいとしている。

・「ごはんをもぐもぐ」まど・みちお 作詞（註22）

ごはんを もぐもぐもぐ くちからたべた
おはなし ペラペラペラ くちからでできた

この曲では、体のはたらきについて歌いながら意識できるようなことばを考える。

・「雨さん こんにちは」吉岡治 作詞、八城一夫 作曲（註23）

1. お山にふる雨は ザンザ ザンザ ザンザンザン かけっこしてる
ザンザ ザンザ ザンザンザン 雨さん こんにちは
2. 野原にふる雨は ジャブ ジャブ ピチャピチャピチャ かくれんぼしてる
ジャブ ジャブ ピチャピチャピチャ 雨さん こんにちは

この曲では、雨はどこに降るかその雨はどんな音で何をしていかを想像して創作する。

・「ゆびの おさんぽ」吉田若葉 作詞作曲（註24）

1. みんなの おなかを パパン パパン ひらいた おててで パパン パパンみんなの おなかを パパン パパン クルクル まわって ハイ おへそ
2. みんなの おでこを トトン トン かわいい ゆびで トトン トン
みんなの おでこを トトン トン トコトコ おりて ハイ おはな

この曲は、ゆび遊びとして創作する。

5. 絵を読む

本稿Ⅳ-1で、心ひかれる絵本のリスト作成について述べてきたが、赤羽根有里子は「自分の心ひかれる絵本がたまってくると、読者の心に響く優れた絵本とはどういうものかを肌で実感できるようになるはずだ。（註25）」と述べ、優れた絵本について、①絵と文のバランスがよい（文のない絵本もあるが）。②絵と文が融合して一つの絵本世界をつくり上げている。③作者によって表現技術法は異なるものの、確固たる（押しつけでない）メッセージ性をもっている。④デザイン、タッチなどの差はあるが、優れた絵本の絵は生き生きとしていて、絵の方から語りかけてくるよう

な迫力がある。⑤その文も磨きぬかれた洗練されたもので、その場面にぴったり合ったものが選ばれている。と5つの点を挙げている。

絵本は、そこに書かれている文を読み取っても、絵が読み取れなければ、読んだことにならない。ページをめくりながら絵を読み取ると、視覚を通して心にじかに物語が伝わってくる。

以下の活動は、できるだけよい絵本を見極める感性を培うために、絵が語る物語を楽しむ心と目を養うことをねらいとしたものである。

①絵を読み感じたことを書く

絵本『くさむら』（註26）を教材として、小グループで行う活動である。作者の目が捉えたダイナミックな世界を、ゆっくりとページをめくり、絵を読み、発見したことや心に浮かんだことばを各自で書く。2回繰り返して読んだ後、3回目はグループ内で一緒に絵を見ながら感じたことを発表し合う。

②絵をみて物語を創る

・『すってんころりん』（註27）

0. 1. 2才の10ページの短い絵本である。絵本の文を消してコピーしたものを各グループで見ながら語り合っ文を考える。その後、絵本の文と自分たちの文を比較して、表現のしかたについて話し合う。

・『雨 あめ』（註28）

文のない絵だけの絵本である。雨の日の長い物語なので、場面を八等分（8グループ）し、一人ずつ割り当てて考えていく。方法としては、最初に大まかなイメージをグループ全員で話し合い、順番に文を書き加えていき、最後の担当で物語を完成させていく。絵の描写が細かく、見開きページに多いところで13場面もの絵が描かれているので、よく絵を見ていると、いろいろなことばが飛び出してくる。グループごとの発表をするが、絵を見る人の視点がはっきりと表現されるので興味深い活動である。

・『ゆきのひ』（註29）

雪の日の田舎の小さな駅の様子を線路の向こう側から見ているように描かれた絵だけの絵本である。町に行く人々、貨物列車からおろされるにもつ……駅の一日を、たんたんと描いてある。まず、学生一人ひとりが物語りを書いてから、実際に幼児が鏡文字で書いた物語を見て、子どもの視点を学ぶ。ゆったりと静かに絵が読める。

③活動の感想

『くさむら』

- ・第一印象は「カラフル」「大きい」だったが、2回目から細かく絵を見るようになって新しい発見があった。みんなそれぞれ視点が違って、いろいろな感じ方や表現があっておもしろかった。

吉 田 若 葉

- ・グループの人数分の思いが出てきた。絵のダイナミックさに感動した。
- ・想像が広がる絵だ。次に予想もできないような展開になるのがおもしろい。

『すってん ころりん』

- ・一つの絵本から沢山の新しいお話が作り出されていたのが、すごくおもしろかった。
- ・絵だけを読むと一人ひとりの発想や表現でいろいろな話が生まれると思った。
- ・絵だけを見て、ある程度話の流れはつかめたけれど、それを子どもたちに伝えるようなことば使いや話し方を考えながら作るのは、とても難しかった。

『雨 あめ』

- ・早く自分の番がこないかと待っていたが、実際自分の番がくると「何て書けばいいのか？」と考えるばかりでとても悩んだ。しかし、悩んだだけあって、できあがった時の喜びはとても大きかった。
- ・「雨」の絵を見ていると、様々な会話が聞こえてきました。
- ・発表を聞いて、それぞれの班で違うのでおもしろかった。同じ内容でもことばの表現が違っていたり、おなじ絵を見ても捉え方が違っていたりと、多くの発見があってとても勉強になった。

④自分自身への気づき

『すってん ころりん』

- ・自分が子どもの前で読んだら……と考えるようになってきた。
- ・自分が子どもの心に戻りつつあるように思えた。
- ・絵を見て話しを作るのが、おもしろいと感じた。
- ・人前で発表するのが、だんだん楽しくなってきた。

『雨 あめ』

- ・普段雨の中を歩くのは嫌だと感じていたのですが、絵を見て、子どもの気持ちになって考えるのが楽しかったです。
- ・実習でたくさん子どもたちと関わったので、「子どもだったら……」ということが一番に思う自分がいることに気づいた。
- ・自分の文は、ことばの膨らみに欠けていた気がする。もっと豊かな発想ができるよう日頃の小さな事一つ一つの感動を大切に、吸収していきたい。

6. 視聴覚教材の製作（パネルシアター・ペープサート）

幼稚園教育要領総則の、幼稚園教育の目標のなかで、自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること（註30）や、日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること（註31）が示されている。授業においても、子どもたちが身近な事象に目を向けるこ

とや、興味をもって、ことばに対する感覚が自然と養われるような、視聴覚教材を製作している。活動のねらいの一つとして、製作過程で子どもの気持ちや感じ方などを十分に話し合うことを重視している。また、誰が見ても操作できるように台本を作成する。作品は、効果的な仕掛けも作れるパネルシアターかペープサートを製作する。筆者はこの活動の間、一作品に対して、少なくとも5・6回から10回ほど話し合いに付き合わなければならない。このように徹底して学生の思考過程に付き合うことで、学生は、努力する喜びや達成感を味わうことができるのである。以下の絵本は表現の参考として紹介した一部であり、これらの絵本を参考として話を考えていく学生もいる。

①身近な事象に目を留める：『あるいてゆこう』（註32）

1・A「さあ でかけよう あるいていこう どんどん どんどん あるいていこう」

B「でも ちょっと とまって みてごらん」

〈いぬが ぐるぐる きの まわり おいかつけこして あそんでいる〉

2・A「〈ちいさな みちを〉あるいていこう どんどん どんどん あるいていこう」

B「でも ちょっと とまって みてごらん」

〈きかいが すなを はこんでいる ぶんぶん あなを ほっている〉

Aの「あるいていこう どんどん どんどん あるいていこう」とB「でも ちょっと とまって みてごらん」を繰り返して、〈 〉の中のことばを考えていく。学生自身が、ちょっと立ち止まって周りに目を留める楽しさに気づき、その情景をリズムカルなことばで表現することをねらいとしている。

②これは の絵本：

・『これは て』（註33）

これは たいせつなものをにぎりしめている て

わたし これにきめた これを4つください といっている て

あとで あそぼうね じゃあ バイバイ といっている てとて ……

いろいろな表情の手を、子どもの生活にそくしたことばで表現している。

・『これは はこ』（註34）

これは はこ プレゼントのはこ これも はこ

びっくの はこ いじわるのはこ これも はこ やっぱりとびだす はこ

びっくりではなくて こんがりの はこ これも はこ つめたい はこ ……

箱は箱でもいろいろな箱がある。その箱を単なる名称ではなく言葉で説明している。

これは、子どもたちが連想しながら楽しめる。

・『これは ひも』（註35）

これは ひも きりっと むすぶ ひも これも ひも

きゅっと むすぶ ひも これも これも ひも ……

いろいろなところで使われているひもを、ページの右端に描いて、次のページのヒントに

吉 田 若 葉

して子どもの想像力を刺激し、子どもが感じるであろう話しことばで表現している。

③連想と発想の転換：『そしたら そしたら』（註36）

「どこからか あおい ビーだまが ころがってきて いけに おちた とっぼーん！

そしたら、そしたら…

かばが がばっと でてきて おおきな くしゃみをした ぐわーくしょん！

そしたら、そしたら…

びっくりして きりんが すべって ころんだ すってん きりん！」

場面が変わる度にそしたら、そしたら…のことばを入れて、前の場面から連想した場面や、発想の転換をして意外性のあるおもしろい場面を考えること。また、必ず擬音を使って、感覚的に楽しめる教材を創ることをねらいとする。

④応答しながら楽しむ教材；ことばあそび

ことばあそびとして、子どもたちと応答しながら操作する教材を製作する。前述の①②③においても同様であるが、子どもと応答しながら操作するので、特に、子どもの興味や反応をしっかりイメージしながら創っていかねばならない。このように子どもをイメージしていく過程は、実際に子どもと関わった時に子どもと対話するのに有効であろうとのねらいもっている。

⑤活動の感想

- ・ 先ず、ストーリーを考える時点でつまづいた。話の展開や仕掛けを考える時も、何度もやり直した。アイデアが浮かばなくてイライラした時もあったが、諦めずに作り続けて良かった。
- ・ 追い込まれると、ちょっとしたことから、ポンとひらめくことがあるんだと思った。
- ・ グループで作る時は、グループ内でのコミュニケーションが十分に取れないと納得できるものは作れない。
- ・ 力を合わせて協力して一つの物を仕上げるのが、こんなにも大変でこんなにも達成感があるものなのだと感じている。0から考え、愛情込めて仕上げたので、後輩や子どもたちにいっぱい使って欲しい。本当に充実したいい時間だった。
- ・ フィギュア、動かし方、ことば掛け、間の取り方など一つ一つに意味があると気づくと同時に、仕上がった作品と考えのずれも見つかり、悔しいこともありました。「もっとこうしたら面白い、ここを動かしたら子どもの反応が見える」と後から気づくことも多くあり、もっと話し合いながら作れば良い作品ができたかもしれない。

⑥自分自身への気づき

- ・ 頭の固さに気づきました。普段の生活を何気なくしているので、何もアイデアが出てこな

い。もっと物を見る目を養おうと思います。時間を有効に使いたい。

- ・自分のボキャブラリーのなさを実感した。
- ・一つずつやっていくごとに、ワクワクして楽しくなってきた。
- ・なかなか合格できなかったが、見せに行く度に、考えが柔軟になっていった。
- ・これほど考えて悩む自分がいるとは……という感じです。一つのことを創り出す時は、大変な準備がいることに気がついた。
- ・様々な意見を取り入れること、考えを深めることを大切にしていきたい。
- ・ことばの使い方を何回も考えて、ことばがとても重要であると気が付いた。

V まとめ

本稿では、養成過程で今求められているものとして「探求的姿勢の重視」と「創造性の育成」をあげ、「創造性豊かな保育者養成を目指す授業のあり方」を、科目「子どもとことば」での報告を通して探ってきた。受講した学生の活動記録に多く書かれていた内容は、感動や発見したこと、失敗や悩んだこと、努力と達成感の記録であった。それらは、個人よりもグループ活動で互いに刺激し合ったことと、探求的な姿勢で十分な話し合いをもったことで生まれてきた。そして、学生の授業に対する積極的な姿勢が育ってきた。そこには、本稿Ⅲ-3で述べた創造性にはたらく要因の自発性・努力・興味・経験・感情・集団が有効に働いていることを見ることができるのである。本稿Ⅰ-2で述べたように、現場によっては実習生に対して、パフォーマンス的な技術を最優先として求めることがある。このことに関して筆者は、創造的な教育が求められている保育の現場に立たなければならない学生にとって、技術の注入が最も重要なことではないと考えている。今後もこの観点から、学生の実態を見極めながら教授内容の工夫を探っていきたいと考えている。

引用文献 参考文献

- (註1) HOKURIKU GAKUINN JUNIOR COLLEGE 2004
- (註2) 関口はつ江 保育者の専門性と保育者養成(解説)『保育学研究』P.9 日本保育学会 2001
- (註3) 森上史朗『幼児教育への招待』P.174 ミネルヴァ書房 1998
- (註4) 有賀和子『保育方法論』P.19 第2章保育方法の基本 1. 幼児と共に創る生活 光生館 1998
- (註5) 吉田若葉『北陸学院短期大学 紀要20号』P.179 1988
- (註6) M・ジェイムス/D・ジョンウオード 本明寛/織田正美/深沢道子=訳 『自己実現への道』P.22 社会思想社 1990
- (註7) 幼稚園教育要領 第1章総則 2幼稚園教育の目標(5) P.2 平成10年
保育所保育指針 第1章総則 1保育の原理(1) 保育の目標 カ P.5 平成12年
- (註8) 成田徹男 編『ことば』みらい 2002
- (註9) 安野光雅 大岡信 谷川俊太郎 松居直『にほんご』福音館書店 2001

吉 田 若 葉

- (註10) 安野光雅 大岡信 谷川俊太郎 松居直『にほんご』P. 180～P. 183 福音館書店 2001
- (註11) 幼稚園教育要領 P. 1 平成3年 文部省
- (註12) 吉田若葉『北陸学院短期大学 紀要20号』P. 181 1988
- (註13) 成田徹男 編『ことば』P. 121 みらい 2002
- (註14) 松居直『絵本の森へ』P. 18 日本エディタースクール出版部 1995
- (註15) 『もこ もこもこ』谷川俊太郎・作 元永定正・絵 文研出版
- (註16) 『ころころころ』元永定正・作 福音館書店
- (註17) 『ごぶごぶ ごぼごぼ』駒形克己・作 福音館書店
- (註18) 『がちゃがちゃどんどん』元永定正・作 福音館書店
- (註19) 『がちゃがちゃどんどん』元永定正・作 こどものとも114号折り込みふろく 福音館書店
- (註20) 木村信之『創造性と音楽教育』P. 168 音楽之友社
- (註21) 『くつがあつたらなにをする?』ビアトリス・シェンク・ドウ・レニエ 文
モーリス・センダック 絵 石津ちひろ 訳 福音館書店
- (註22) 『ごはんを もぐもぐ』フレーベル館
- (註23) 『こどもと自然<その上>』P. 104 日音楽譜出版
- (註24) 『北陸学院短期大学紀要第15号』P. 162 1983
- (註25) 成田徹男 編『ことば』P. 121～P. 122 みらい 2002
- (註26) 『くさむら』田島征三・作 偕成社
- (註27) 『すってんころりん』なかのひろたか 作 福音館書店
- (註28) 『雨 あめ』ピーター・スピアー 作 評論社
- (註29) 『ゆきのひ』佐々木潔 作・絵 講談社
- (註30) 幼稚園教育要領 第1章総則 2幼稚園教育の目標(3) P. 2 平成10年
- (註31) 幼稚園教育要領 第1章総則 2幼稚園教育の目標(4) P. 2 平成10年
- (註32) 『あるいていこう』アンナ・クララ・チードホルム 作 菱木晃子・訳 ほるぷ出版
- (註33) 『これは て』五味太郎 作・絵 岩崎書店
- (註34) 『これは はこ』五味太郎 作・絵 岩崎書店
- (註35) 『これは ひも』五味太郎 作・絵 岩崎書店
- (註36) 『そしたら そしたら』谷川俊太郎 文 柚木弥郎 絵福音館書店